

各駅停車・大分県歴史散歩

ふるさと駅の駅

(17) 豊後竹田・豊後萩

初版：2007年6月22日

73 豊後竹田①

荒城の月と緑と花と



●この電子ブック「ふるさとの駅」＝各駅停車・大分県歴史散歩は、昭和58(1983)年7月20日から翌年の1月28日までの約半年間、115回にわたり大分合同新聞に掲載されたものです。25年後の今年、電子ブックとして復刻しました。

したがって記事中の「いま」や「現在」は25年前の状況を示しており、その後駅名の変更や路線の廃止などもありますが、当時を思い浮かべながらお読みいただきお楽しみください。

◀ 伝統的文化都市のシンボル・岡城跡

■城下町の伝統と文化

駅に列車が着くと、ホームに滝廉太郎の「荒城の月」のメロディーが流れる。駅前広場に出ると、朝倉文夫の裸婦像「時の流れ」が立つ。

そして、竹田市のシンボルであり、「荒城の月」のイメージを生んだ岡城跡の本丸には、文夫作の廉太郎像もある。二人は、「画聖」といわれる南画の田能村竹田に続いて、竹田が育てた「楽聖」「彫聖」であり、竹田中学の先輩、後輩だった。

彼らをはぐくんだのは、岡藩7万石の城下町としての伝統と文化、それを取り巻くみずみずしい自然だった。同時に竹田は、大野川流域の政治、経済の中心であり、江戸時代から現在まで、地方の中核都市の役割をこなってきた。

いま竹田は「伝統的文化都市」の指定を受けている。周りを岩山で囲まれた市街地に入るには、鉄道も道路もトンネルをくぐらねばならない。このトンネルはいわばタイムトンネル。そこを抜けると、昔の城下。

竹田市は城下を核として、周辺の農業地帯と連携する文化的田園・観光都市をめざし、`荒城の月と

緑と花の町、を合言葉にして、人口減少をはねかえし、新しい浮揚をねらっている。

■難攻不落の要害

歴史散歩は、当然のことながら岡城跡から始め、市街地をひとめぐりすべきだろう。

岡城は南に滑瀬（ぬめりぜ）川（大野川）、北に稲葉川を自然の堀とする天険の要害である。最初に築城したのが緒方惟栄で、頼朝と不仲になった源義経を九州に迎えるため工事にかかったという話は疑わしいが、古くからなんらかの形でとりでとして利用されていたことはあったかもしれない。

大友氏が豊後に入ったのち、建武年間（1334～36年）に支族の志賀貞朝が入城したとも伝えるが、実際はそれより半世紀ほど下るだろう。しかし、いずれにせよ志賀氏はここを拠点として北志賀と称し、勢力を拡大した。天正14（1586）年の島津軍侵入のさいは、20歳の城主、志賀親次がわずか1000人の兵で城を守り抜き、難攻不落の名城の名を高めた。

大友氏の除国で志賀氏のあとには文禄3（1594）

豊後竹田駅開業：大正13
（1924）年10月15日

年、播州三木から中川氏が転封されて入城、3年ばかりで城の改修と拡張をし、同時に挟田にあった城下町をいまの市街地に移して整備した。城は平山城で、その形から臥牛城ともいう。現在、建物はすべてない。荒城、だが、加藤清正の指南を受けたという大手門あたりをはじめ、石垣をよく残し、国史跡である。

■谷間には洞窟礼拝堂

城跡を下って、広瀬神社から市内まわり。同社は日露戦争の旅順港閉塞作戦で戦死、軍神といわれた竹田出身の広瀬武夫海軍中佐をまつる。

殿町はその名でもわかるように武家屋敷のあったところで、このあたりを中心に市街のあちこちに往時の面影が残されている。その町筋から谷間に少し入ってキリシタンの洞窟礼拝堂（県史跡）がある。

岡城を守った志賀親次はドン・パウロの教名をもつ信者で、彼をきっかけに竹田地方には相当数の信者がいたらしい。江戸期に入って禁教令が出てからも、ひそかに信仰する者は多く、処刑の記録もある。しかし、岡藩の家老の中に神父をかくまった人もあ

り、そうした神父を中心に洞窟で祈りがささげられたものだろうか。

岩壁をくりぬいた洞は広さ10平方メートルほど。奥壁に祭壇がしつらえられ、天井はドーム型。このほか一帯にはいくつかの石窟が見られ、清水も湧いていることから、生活の場となったことも考えられる。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等
(駅からのおよその距離)

- ◇岡城跡 (2キロ)
- ◇広瀬神社 (1キロ)
- ◇同社から殿町、洞窟礼拝堂、旧竹田荘、歴史資料館、滝廉太郎旧宅、観音寺、円通閣、愛染堂、仏足石を経て駅まで回るコース (約2キロ)
- ◇英雄寺など (1キロ)
- ◇騎群城跡 (2.5キロ)
- ◇城原八幡 (7キロ)
- ◇神原・健男社 (15キロ)
- ◇穴森社 (16.5キロ)

⑦4 豊後竹田^下

田能村竹田と滝廉太郎



◀ 南画の最高峰となった竹田の旧宅

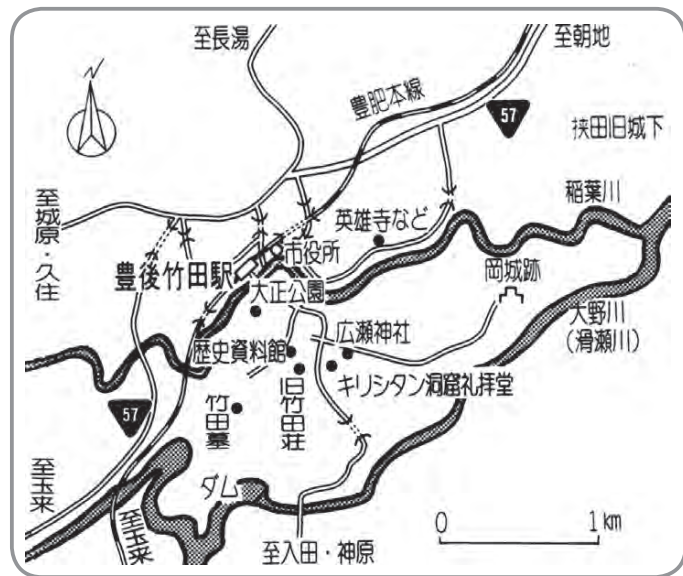
■国史跡の旧竹田荘

武家屋敷の通りから南に回って、市街を見おろすところに旧竹田荘（国史跡）がある。田能村竹田の旧宅だ。竹田は安永6（1777）年に岡藩の典医の二男に生まれ、名は孝憲。22歳で江戸に出て画を修め、わが国の南画の最高峰となった。

旧竹田荘は彼が画業に専念するため寛政2（1790）年に建てたもので、庭に使いふるした筆を供養した筆塚もある。天保6（1835）年没。墓は少し離れた丘の上であり、これも国史跡となっている。

下れば近年建てられた歴史資料館がある。先史遺跡からの出土品はじめ、竹田の歴史を語る物が出陳されているが、見逃せないのはサンチャゴの銅鐘（国重文）。藩主中川氏を祭った中川神社に伝わっていたもので、高さ83センチ、口径66センチ。十文章と「ホスピタル・サンチャゴ・1612」の銘がある。同病院は長崎のミゼルコルディア（慈善院）の付属病院だったという。どういう経路で竹田に来たかはわかっていない。

町の中の小さなトンネルをくぐると滝廉太郎の旧



宅。彼は明治12（1879）年に生まれ、直入郡長となった父に従い11歳で竹田に来た。15歳で上京、音楽学校に入ったが、病をえて明治30（1897）年に竹田で療養の間、岡城跡あたりによく遊んだ。そして翌31（1898）年、「荒城の月」が生まれた。

■円通閣と愛染堂

江戸期の建物や庭を残す御客屋跡から大正公園に登ろう。

十六羅漢を見ながら観音寺の石段を登ると円通閣が建つ。藩の儒学者で、田能村竹田の師でもあった唐橋君山が蘇州寒山寺を模して建てたと伝える。彼は寛政10(1798)年から藩主の命を受けてここで『豊後国志』の編集にかかったが、途中で病没。竹田らがそれを引き継いで享保3(1803)年に完成した。大分県の貴重な地誌である。

愛染堂(県文化財)に進む。寛永12(1635)年の建立。日光東照宮造営奉行の一人だった藩主の中川久盛が飛騨の工人を伴って帰り、棟梁役にあてて造営したという。桁行、梁間とも三間の単層宝形造り。外部は唐様で、四隅の軒下に天邪鬼と人面のついているのが面白い。

境内に仏足石がある。地中に埋もれていたものが昭和29(1954)年に発見された。県下では宇佐市の東光寺とここだけにみられる。

公園から北に下って稲葉川のほとりに出ると駅は近い。駅前から市役所の前を通って川沿いに下ると、

朝鮮ボタンで知られる英雄寺、線刻磨崖仏や中川氏歴代墓地の碧雲寺、さらに城下から外部へ通ずる七里峠の旧道登り口のそばに高流寺などがある。このほか駅の裏手に下木磨崖仏なども。

■北と南の郊外

郊外に足を伸ばしてみよう。北に出て国道57号線を横切り、久住町への道を進むと騎群(木牟礼)城の跡がある。鎮西八郎為朝が築き、しばらく滞在したという伝説がある。中世に志賀氏が岡城に入るまでの居城である。

さらに行くとも城原八幡社。景行天皇が菅生で土蜘蛛と戦うさい(玉来駅の項で紹介)に陣を置いたところといい、祭神は同天皇ほか。10月の秋祭りに奉納される阿鹿野獅子舞(県無形民俗文化財)は天皇軍慰問に起源するとも伝える。

南の郊外に行くと、大野川本流に魚住の滝がかかる。みごとな水勢を見せていたものだが、昭和30(1955)年にすぐ上流にダムができ、水を失ってしまったのは悲しい。

丘を越して緒方川の上流部に出ると入田である。

かつての入田郷で、大友氏の庶家で五家老の筆頭にあった入田氏の本拠地で、津賀牟礼城のあったところ。いま豊富な水を利用してマスやエノハの養殖が行われ、カボスなどとともに竹田の味覚となっている。

■大蛇の言い伝えも

支流の神原川に入ると、やがて美しい渓谷となり、そこを抜けるとぽっかり開けた明るい村に出る。祖母山の北のふもと、神原である。

祖母山の神である健男霜凝日子社と穴森社がある。神の原、だ。健男社は大きな岩窟のなかにあり、穴森社にも洞穴がある。この洞穴が大神氏出自伝説の舞台であり、祖母大明神である大蛇のいたところと伝えられる。

緒方川沿いの道をそのままさかのぼれば、祖母山の西を回って熊本県の津留から宮崎県の上五ヶ所に着く。

ここが大野川の源流の地。祖母山の西斜面に発した本流は大谷川と呼ばれ西流するが、阿蘇の外輪山に行く手をはばまれて向きを北に変え、大分県に

入ってくるわけ。五ヶ所からさらに進めば、神話の地、高千穂町に行ける。



75 玉来

古い土壌に新しい町

玉来駅開業：大正 14
(1925) 年 11 月 30 日



◀ 扇森稲荷社の鳥居トンネル

■扇森の稲荷さま

無人化されて駅舎はさびしいが、その柱には朱色が残り、駅前には赤い大きな鳥居が立っている。九州三大稲荷に数えられる扇森稲荷社の最寄り駅だからである。駅から丘を越えて玉来の町なみと国道57号線を横切り、最近建てられた大鳥居をくぐって参道へ。社殿は小高いところにあり、そこまでおびたしい数の赤い小さな鳥居の林の中の石段を登って行く。日ごろから参拝者は多いが、旧暦2月の初午の日を中心に3日間行われる大祭には、県内はもちろん九州各地や関西方面からも人々がつめかけ、国道がマヒするほど。

元和2(1616)年の創建といい、一般には狐頭様(こうとうさま)と呼ばれている。その昔、このあたりにいた白いキツネを岡藩士が斬(き)り、頭をこの山に埋めたことから、一帯を狐頭山、狐頭原といていたからだという。そういえば、玉来の古い名は猫原だそうである。

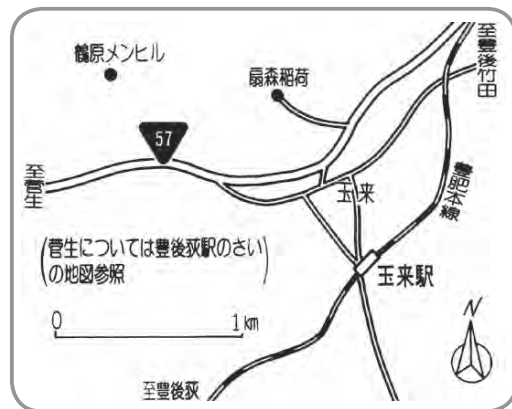
■古くからの宿場町

玉来という地名は珍しい気がするが、同じ名は県内

に8カ所あり、玉洗(たまらい)も4カ所ある。いずれも狩溜(かりたまらい)、つまり狩猟に出かけるときに人々が習合する場所のことである。ここの玉来は肥後に通ずる重要な往還に位置しており、城下町の竹田よりも古くから宿場町として成立した。正安2(1300)年のことといい、その数年

後にはすでに本町、新町、横町があったそうだ。また、志賀氏が騎群城(豊後竹田駅で紹介)に入ったあとは城下町的な性格も加わり、いっそう発展したらしい。

それも中川氏が竹田に城下町を置くことになり、旧城下の挟田を移転させたと同様に、玉来からも商家53軒を移したのを機に次第にさびれた。そのため岡藩では京都の島原、長崎の丸山をまねて、ここに遊廓を置いたが、寛文4(1664)年に大火災があり商家が残らず焼失した。その後、復興につとめたが一筋の町だけになったといわれる。



■市街地化が進む

それでも近代になって、なおにぎわいをみせていたが、豊肥本線の開通で宿場町としての性格が薄れた。

加えて昭和 29 (1954) 年に竹田と合併してからは自治体の中心でもなくなり、竹田市街の商圈拡大のあおりもあって打撃を受け、転廃業する商店も多かった。

だが、最近は一帯が様変わりし始めている。なにしろ竹田市街が岩山に囲まれた狭い盆地で、それ以上広がる余地がないうえ、国道 57 号線がバイパスとなって市街地を避けて玉来に通じたことから、ここが見直されたわけ。

企業が交通の便を求めて新しい国道沿いに進出しているのをはじめ、住宅もたくさん並ぶようになった。すでに市公民館、文化会館、青少年センターも建ち、市教育委員会も移転してきたし、竹田警察署も移ってきた。

竹田市街が伝統的文化都市として古い町なみを承ろうとしているのに対して、玉来はより古い土壌の上に新しい町なみを形成しようとしている。

■先史大集落の菅生

ところで、玉来から国道を西にたどり台地を登りつめた菅生にも宿場があった。いまは往時の面影はほとんどなく、ドライブインがあるていどの広い高原畑作地帯だが、先史時代には一帯に大集落があり、いわば先進文化地帯だったところ。

縄文・弥生時代のヤトコロ、小園、田頭、楠野、石井入口、禰疑野各遺跡はじめ、たくさんの集落跡が眠っており、古墳時代では七ツ森古墳群 (国史跡) や蜘蛛塚、小塚、石舟などの古墳がある。特に七ツ森のうちの二基の前方後円墳は古い時代の柄鏡式で、四世紀のものと考えられている。

これらのことから、南方の荻町を含め、一帯には畑作を基盤とする強力な社会が生まれ、豪族が成立していったことがわかるが、ここで想起されるのが景行天皇親征伝説。天皇軍が城原に陣を構え、禰疑野で土蜘蛛の八田、打猿と大会戦、血で血を洗う激しい戦闘で滅ぼすくだりは伝説のクライマックス。大和朝廷の日本統一の過程を反映しているものとみられ興味深く、この高冷の台地の風の中に、土豪の雄叫 (おたけ) びを聞く思いがする。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等 (駅からのおよその距離)

- ◇扇森稲荷社 (1.5 キロ)
- ◇鶴原のメンヒル (柱立神社境内。阿蘇溶岩が柱状節理で割れて立ち、信仰されている。2.5 キロ)
- ◇七ツ森古墳 (7 キロ)
- ◇禰疑野神社 (景行天皇を祭り、近くに行宮跡記念碑。9.5 キロ)
- ◇入田・神原方面 (豊後竹田駅より玉来駅からの方が3キロぐらい近い)

76 豊後萩

遺跡の上に新しい農業

豊後萩駅開業：昭和3
(1928)年12月2日



◀ 県文化財に指定されている岩戸の車橋

■ 九州の高天原、

目路（まじ）はろぼろと広がる阿蘇外輪山の高原にあるのが荻町。はるかに九重、祖母、阿蘇の三山を望み、それが描く大きな三角形の中にあって、九州の高天原（たかまがはら）、などと呼ばれる。

高天原は古代神話の神々が集ったところだが、この高原は私たちの祖先が大集落をいとなんだところ。玉来駅のさいに紹介した竹田市菅生台地の南にあたり、おびただしい遺跡がある。

その数はおよそ 100 カ所ともいわれ、高原の地下はすべて遺跡といえる状態。縄文・弥生遺跡の重なりあっているものが多い。これは菅生台地についても同様である。

特に政所遺跡からは細石核が出土したほか、口の部分に貝殻の模様をつけた尖底土器が発見され、縄文早期の標識として政所式と呼ばれている。

弥生時代で注目されるのは古賀遺跡だろう。東西 700 メートル、南北 400 メートルほどの範囲に住居跡のあることがわかり、昭和 54（1979）年に一部を発掘したところ、なんと 100 軒以上の住居跡が折り重なるようにして見つかった。

■ 九州のチベットへ、

先史時代人には住みやすい環境を与えた地だったかもしれないが、時代が下るにつれて、そこは次第に取り残されるようになった。高冷地、そして交通の不便なことからである。

外輪山斜面のため、高原は標高 700 メートルから東下がりになり 3～400 メートルあたりまで続いている。河川もまたほとんど平行して東に流れくんだり、大野川本流や、滝水川、藤渡川、山崎川はじめ大小の川が深く切れ込んでいます。このため高原は東西に細長いいくつかの台地に分断される。

行動範囲が比較的狭く、自給自足が中心の古代人ならともかく、広域経済の時代ともなると、この谷の深さが物資の流通を障害、発達を遅らせる。

川を渡るためには、切り立った崖につけられたつづら折りの道を下り、また登らねばならなかった。



谷底には川幅の狭いところを選んで橋をかけたが、洪水のたびに流され、崖の道も崩れた。こうして、九州の高天原、はいつしか九州のチベット、ともいわれる存在になってしまった。

■道と水とに苦勞

だが、人々は努力した。その苦勞の結晶が山崎川にかかる江戸期の岩戸車橋（石造アーチ橋）である。住民の難儀を見かねた柏原の大庄屋が、利用者や近郷の人たちに負担を求め、岡藩からも資金を借りて弘化4（1847）年から嘉永2（1849）年にかけて造った。橋台の高さ11.4メートル、長さ28.2メートル、幅4.4メートル。当時の豊後では屈指のものであり、石橋の多い大分県下でも代表的な存在として県文化財に指定されている。

谷が深いことは水利の便が悪いことでもある。そのためには井路が引かれた。江戸期に葎原（むぐらばる）、柏原の両井路が開かれ、明治になって葎原を大改修して杉園井路とし、さらに前谷、中山、前河内、馬背野の各井路、大正12（1923）年からは3年がかりで大規模な柏原井路もできた。これによって水田はぐんと

広がった。が、稲作には高冷地という限界がある。

そこで近年は悪条件を逆手にとって、高冷地野菜とその加工、さらに花、畜産を中心に「高原を生かした産業」への歩みが着実に続けられている。また、交通、流通の面では分断された台地を結んで南北に広域農道も通じた。新しい橋も次々誕生、特に大野川にかかる合ヶ瀬大橋は橋脚のある橋では九州一の高さで、江戸の岩戸、昭和の合ヶ瀬として名高い橋になった。

■世直しの農民一揆

史上有名な事件としては四原一揆（よはるいっき）がある。藩政時代、寸断されている台地を大きく葎原、恵良原、柏原に分け、竹田市域の菅生原とあわせて四原と呼ばれており、その四原の農民が文化8（1811）年に起こしたもの。ここを震源として一揆は豊後一円に広がり、文化大一揆といわれた。

農民たちは玉来の町から竹田の城下近くまで押し出し、藩に要求をのませた。一揆が引きあげたあとには、「四原世直大明神 総氏子在中町中」の高札が建てられていたそうで、農民の行動が世直しと評価された日本で最初のものといわれている。 **N**

<メモ>

周囲にある名所旧跡等（駅からのおよその距離）

- ◇岩戸の車橋（1キロ）
- ◇合ヶ瀬大橋（5.5キロ）
- ◇白水の滝（県境にかかる。いまのところ足場が悪い。10キロ。少し下流の陽目に県天然記念物のカワノリを産す）
- ◇荻神社（県無形民俗文化財の湯立て神楽が伝わる。2キロ）
- ◇下荻岳（信仰の山で、町名の起源ともなる。4.5キロ）

デジタルブック版

「ふるさとの駅＝各駅停車・大分県歴史散歩＝」（17）

2007年6月22日初版発行

筆者 梅木 秀徳

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター

発行 NAN－NAN事務局

〒870-8605 大分市府内町 3-9-15

大分合同新聞社総合企画室内

このデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたウェブプロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環として作成・無料公開しているものです。デジタルブックは、ほかにも多数。ネットに接続して上記ボタンを押し、「NAN-NAN」のサイトをご利用下さい。